新潟職能短大通信

～私のお国自慢（熊本城その二）～

新潟職業能力開発短期大学校　能力開発部長　坂本龍彦

築城の名人と云われた清正亡き後、加藤家では家康から江戸城の石垣普請を命じられ「清正流」の堅牢な石垣を完成させました。翌年大雨が降り、他の大名が造った石垣は基底部から脆くも崩れてしまいました。しかし、加藤家が築いた石垣はビクともしなかったそうです。この堅牢な石垣づくりを現場で支えたのは、清正が近江から連れてきた石工技術者集団、穴太衆（あのうしゅう）でした。清正の築城技術、実はこの技術者集団によるところが大きかったようです。

ところで、熊本城の最大の特徴は「武者返し」と呼ばれる美しい曲線を描く石垣にあります。この石垣は「打ち込みハギ」という工法で積まれています。この工法では、石と石の間に隙間ができるため小さな石を詰めてあります。その後、時代は慶長から江戸時代へと移り、石と石とを完全に密着させる「切り込みハギ」と呼ばれる工法が発達しました。

熊本城に限らず悠久の時を越えてそびえ立つ石垣は何度見ても感動します。ふるさとにお城があることは、本当によいものです。ちなみに、新発田城の石垣は「切り込みハギ」で造られており、なかなか見応えがあります。

「武者返し」が美しい熊本城の石垣

「大倉翁と新発田」（三）

川瀬勝一郎

鶴吉（大倉翁）江戸へ

鶴吉が江戸へ出たのは安政元年（一八五四）であった。江戸へ出る直前の嘉永六年（一八五三）に父・千之助を、続いて翌年に母・千勢をうしない、大きな打撃を受けている。父・千之助は読書が好きで、人はよいが家業には熱心でなかったという。大倉翁は後年その頃既に家運は傾いていたと親しい人に語っている。

江戸へ出るきっかけは、学友の白勢三之助の父親が武士に対し土下座の仕方が悪いと閉門になったのを見て決意したもので、「私はこの時の憤慨で江戸へ出る決心を固めたのである。」と『到富の鍵』で述べている。

鶴吉の江戸へ出る決意を聞き、姉貞子これを激励しその貯へたる二十両を与えている。また終生の友であった原宏平はその志を理解し、杯を交わし別れを惜しんでいる。

この時期、嘉永・安政の頃の国内事情は厳しいものだった。嘉永元年（一八四八）対馬、五島、蝦夷地、陸奥沿岸などに、外国船がしきりに出没するようになり、幕府をはじめ諸藩は要地に台場を築くなど対応に追われている。

安政元年（一八五三）から安政二年にかけて諸外国の要求で次々に和親条約を締結し、下田、長崎、函館、などを開港している。吉田松陰が密航を企て捕らえられたのは、安政元年のことだった。

賢明な鶴吉（大倉翁）がこの動きを知らなかったとは考えられない。この様な情勢のなか「江戸で一旗挙げなければ二度と故郷の土は踏むまい」と心に誓って出発したのだった。

郷土の偉大な実業家
「大倉喜八郎生誕之地」
新発田市大手町 1,3,11/12（旧下町）
平成13年8月建